2016 年度 オランダ・ドイツ ESD 研修旅行
—その意義と今後の展望—

報告者
広島大学大学院教育学研究科　博士課程前期　2 年
須谷弥生

１．研修旅行後の活動報告

研修旅行から、約一年半が経過しようとしている。報告者は、現在、広島大学大学院教育学研究科の博士課程前期に在籍しており、修士論文の執筆に専念している。研修旅行時から現在に至るまで、大学院生として研究に勤しんでいたため、ESD の実践を学校現場で行う機会には恵まれなかった。では、報告者は研修旅行後に ESD に関してどのような活動を行ってきたのか。ここで簡単に報告する。

昨年度一年間は、広島ユネスココンソーシアム事業の事務補佐として、ESD 研修会の運営などに携わった。大規模な研修会が大学内で開催されるのを前に、事前の準備や研修会の広報活動、HP の作成などを行い、ESD 研修がより多くの人に知れ渡るよう尽力すると共に、その内容自体がより充実したものになるよう献身した。一方で、昨年度 4 月に立ち上げたユネスコクラブに継続して参加し、12 月の ESD 研修会では研修旅行の成果のポスター発表を行った。今年度に入り、研究に従事する必要性からユネスコクラブへの参加が困難になったが、大学内で開催された研修会には積極的に参加し、ESD に関する知見を広げることに注力した。

このように、報告者自身が研修旅行後に行うことが出来たのは、主にインプットと ESD を実践している先生方あるいは実践しようとする先生方の補佐であり、研修内容の成果をアウトプットするにしても、それは研修会でのポスター発表に留まった。しかし、大学院生としての立場を考えると、この程度の活動が限界であったと思われる。報告者がここで強調したいことは、研修旅行後から今日に至るまでに既に行った実践の報告よりも、これから実現しようと考えていることである。

２．研修旅行の意義

現在も継続して開催されている ESD 研修会や ESD に関連する研修会は、大きく分けて 2 つの項目で構成されていると思われる。1 つ目は ESD の理論部分に関するもので、ESD そのものやそれに関連する内容についての専門家による講演であり、2 つ目は国内外の学校現場における実践報告である。専門家による講演や多数の実践報告から学ぶことは大いにあるが、しかし、そこで浮かび上がってくるのは、「ESD とは何か」という根本的な問いである。研修会のアンケートでは、しばしば次のような記述が見受けられる。「結局、ESD とは何なんだ。どんな学習活動に対しても、ESD を実践しました、と言えてしまえるのではないか。ESD というものが何なのか、もう少し説明して欲しかった」。このような戸惑いの声に対して、我々は今、ESD 実践展開への確かな方向性を明示することが果たしてできるのだろうか。恐らく多くの人々は、このような問いかけをされた時、口をつぐんでしまうだろう。このような状況にある ESD 実践は、現在、新たなフェーズへ入ることが要求されている、と報告者は感じている。

研修会への参加を重ねていくうちに感じることは、哲学の不足である。ここでの哲学とは、難解な概念や用語を用いて抽象論を展開することを意味しているのではなく、ESD に向き合う一人一人が ESD そのものやその必要性について一度立ち止まり、深く考える、ということである。しかし、そもそも ESD の必要性を感じること自体、そう簡単ではない。ESD 実践者のうちで、次のようなことが囁かれている。「予算があるうちは様々な活動が可能になるが、予算がなくなれば ESD 実践は出来なくなる」。「上から ESD をやりなさいと言われているからやっているわけで、誰もやりたいわけではないんじゃないか。生徒も教師も時間を取られるばかりで…」。このような言葉が発せられている事態は、教員に ESD の必要性が実感されていないことを示しているのではないだろうか。実際、我々の日常的な生活においては、ESD の必要性は目に見える形でほとんど現われないのであり、現われるとすれば多くの場合、メディアを通してである。我々は、メディアを通して初めて世界で起こっている惨事を目の当たりにし、その時に初めて、その必要性を痛感するのである。

このような状況において、教師たちはどのようにして哲学を展開していくきっかけをつかむことができるのだろうか。報告者は、その答えの一つとして「研修旅行」を提示したい。ESD の問題は、想像力の問題と密接に関係している。そして、想像力の問題には、感性の問題が密接に関係している。目の前にある出来事に対して何を感じ、何を考えるのか、この問題領域においては知識という浅薄なものではもはや太刀打ちできないのである。研修旅行は、身体を伴って ESD とはそもそも何か、なぜ必要なのかを考える契機を与える。そこで見た光景、感じたことは、我々一人一人の心に確かに刻まれるのである。強制収容所の存在を教科書あるいは書物を通して知るということと、実際にその場を訪れ、何かを考えるということに雲泥の差があることは容易に想像がつくだろう。場は、時代を越えて、訪れた人々に対して直接何かを語りかけるのである。そのような経験をした我々は、その時の感覚と共に記憶を掘り起し、目の前の子どもたちに何かを伝え、共に考えることが出来る。ここに、ESD 実践の神髄があるのではないだろうか。

ESD の実践報告において、実践内容は目に見える形として提示される。無論、それが研修会においては求められることである。しかし、目に見える形として現われている側面ばかりに注視していると、実践の形骸化を招く恐れがある（あるいは、すでに招いている可能性も多分にある）。学校現場における ESD 実践や研修の意義は、一義的に言うことが出来ない上、その成果は即座に現われるものでも、数値として現われるものでもない。研修旅行においても同様である。なぜなら、ESD のうちのアスペクト E が、本質的にそれを孕んでいるからである。ESD について探究する専門家も、実践する教師も、ESD を先導し支援する行政も、そのことを承知しておかなくてはならない。

さて、ここにはいくつかの課題も残っている。想像力というある種の力とはどのようなものなのか、そしてそれはどのように育むことができるのか、感性とはそもそも教育できるものなのだろうか、といった思想的な問い。それを教育実践の中で展開していくためには、どのようにしたらよいか、といった方法論的な問い。報告者は今後、博士課程後期に進学し、将来的に教員を志す学生と共にこれらの課題を探求していきたいと考えている。長く細く続くこの道のりを、今回の研修旅行は報告者に与えてくれたのである。

３．今後の研修旅行に向けて

昨年度行われた研修旅行は初年度目ともあり、いくつかの改善点が見出される。今後これらの改善点を基に研修旅行を改善し、継続的に取り組むことが求められるだろう。ESD のアスペクト S と D が、その必要性を提示する。

報告者が今回の研修旅行を経験して提案する改善案は、以下の 2 点である。1 点目、ESD 先進国である旅行先の教員と研究会を行うこと。日本の教員や学生が、研修旅行を通して ESD の必要性を肌身で感じたとしても、それをいかに実践していくのかは別の問題として浮かび上がってくる。いかに実践するかという問いは、方法論的な議論を巻き起こすだろうが（しかし、それも勿論重要なことではある)、ここでは授業を展開する具体的な方法というよりもむしろ、授業を展開する教師一人一人の熱意あるいは情熱に触れることに意義があると考える。彼らが何を思い、何を感じて実践に取り組んでいるのか、その姿勢そのものから得るものがあるのではないか。そしてそれは、直に合い、語り合うことによって熱烈な体験として意味を持つのではないか。2 点目、研修者の事前と事後の学びを充実させること。今回の研修旅行でも事前学習の機会があり、それに加えて各自で HP などを利用して事前学習に取り組んだが、そこで得られたものは知識であった。単に書物を用いて得た知識を基に、実際にその場に行ってみることが目的の研修では、得られる知見が知識のレベルに留まってしまう可能性があり、研修旅行に行く意義が希薄になる恐れがある。研修旅行そのものにより意義を持たせようとし、それを効果的に活用しようとするならば、学び手の学びを知識のレベルに留めるのではなく、知の次元にまで到達させる必要がある。例えば、第二次世界大戦中にドイツで行われていたことを知識として知ることと、その出来事をどのように捉え、何を考え、どのように教材として扱うかは、別の問題として浮かび上がってくるからである。お互いがその場で何を感じ、何を考えたのか、それを研修旅行中あるいは研修旅行後に共有するだけでも、研修旅行の意義は随分と違ってくる。

報告者という立場にありながらも、今後の研修旅行に対する改善案を提示するのは恐れ多いことではあるが、今後の研修旅行が今回の反省を基に改善され、継続的に行われることを望む。先に述べたように、研修旅行は身体を伴った全人的な経験であり、それは何事にも代え難いものであるからである。